紹介

呉座勇一著

『一揆の原理

――日本中世の一揆から現代のSNSまで――』

中世の国人一揆の研究を中心に今まで多数の論文を発表してきた若手研究者が、一揆について解説した本である。一般向けの書物であるが、著者の最新の研究成果が色濃く反映されており、研究者にとっても本書は大いに利益をあたえてくれる。

その成果として真っ先に挙げるべきは、中世の武士が国人一揆を結成するときに作成する起請文、すなわち「一揆契状」に関する研究であろう。一揆契状の実証的分析を土台として、国人一揆の特質が論じられている。

何より、戦前以来膨大に蓄積されてきた一揆研究に関する定説への批判も踏まえて、一揆を総体的に論じている点は特筆されるべきである。

著者は、マルクス主義歴史学に基づいて一揆を反体制的な階級闘争・革命と見なしてきた従来の一揆研究を批判する。だが一方で、マルクス主義的な唯物史観へのアンチ・テーゼとして起こった一九八〇年代以降の社会史研究に対しても、研究史上の功績を認めながらも批判的である。一揆結成時に行われた「一味神水」の儀式を過大評価するなど、社会史研究は一揆の宗教的側面を過度に強調する傾向があったという。

一揆の本質は、反政府の武力行動でもなく、前近代の未開社会の呪術的信仰でもない。一揆とは、人と人とをつなぐ紐帯であり、一種の「契約」であった。これが本書の根底に流れ、著者が繰り返し最も強く主張する一揆観である。また、書名の副題にも明記されているとおり、ミクシィやフェイスブックといった現代のインターネットのソーシャル・ネットワーキング・サービス（SNS）と中世の一揆の類似点を見出している点が本書の大きな特徴である。

加えて、江戸時代や明治時代初期の一揆や、荘家の一揆や土一揆あるいは寺社の強訴といった多種多様な中世の一揆、そして宗教思想や刀狩りなど一揆以外の研究の最新成果も可能な限り盛り込んでおり、幅広く目配りが利いた書物となっている。なお終章で、東日本大震災以降の脱原発運動と江戸時代の百姓一揆との共通点を見出し、そこに問題を提起している点は、SNSへの言及と併せて議論を呼びそうである。ともかく、本書が意欲作であることは間違いないであろう。

（A5判　二三七頁　二〇一二年一〇月　洋泉社　税別一六〇〇円）

（亀田俊和　京都大学文学部非常勤講師）